

移動という尊厳



長尾和宏 (ながお・かずひろ)
 東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る、総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。54歳。

前回の「認知症って本当に病気の？」という問いかけに、度肝を抜かれた方もいるでしょう。2回目では「移動という尊厳」について考えてみましょう。

世の中には「牢屋」という場所があります。悪いことをした人が入る場所です。3食付いて、おまけに静かな環境で読書もタップリできます。日々、疲れた私などはもし機会があればそこで一休みした

境内でデイサービス

筋萎縮性側索硬化症（ALS）の方も、人工呼吸器を装着しながら海外旅行に出かける人がいます。

何日後には必ず家に帰るのに、わざわざしんどい目をしてでも海外旅行をするのはなぜでしょうか。「移動」が人間の本能であるからであると、私は思います。

認知症の人はどうでしょうか？ 最近まで精神科病院への入院という名目で「隔離」

す。筋萎縮性側索硬化症（ALS）の方も、人工呼吸器を装着しながら海外旅行に出かける人がいます。

何日後には必ず家に帰るのに、わざわざしんどい目をしてでも海外旅行をするのはなぜでしょうか。「移動」が人間の本能であるからであると、私は思います。

認知症の人はどうでしょうか？ 最近まで精神科病院への入院という名目で「隔離」

いところでず（笑）。

しかし、なぜ、そんな天国のような場所を「牢屋」と呼ぶのでしょうか？ 外に出られないからです。人間は、たとえ用事がなくても街中や自然の中を勝手気ままにウロウロしたいものなのです。私は

余命2週間の末期がん患者も在宅療養している場合は家族で近場の温泉に行かれま

されてきた歴史があります。かつては統合失調症も同じでした。「隔離」といえば、病院以外にも介護施設があります。特別養護老人ホーム、老人保健施設、グループホームなどです。

私が知っている施設の玄関口は、厳重に施錠されています。私が入り出すときも職員が電子キーの暗証番号を押してくれま。入所者が徘徊して施設外で事故にあえば、施設側は管理責任を問われるので仕方がないのかもしれない。しかし何度も「脱走」を試みる入所者の顔を見た

広い境内で「移動」という尊厳が確保され、日光を浴びながら好きなことをして過ごす、夜がよく眠れます。私は思わず、「放牧系介護」と命名してしまいました。認知症ケアの基本は「移動」とい



「認知症ケア」シリーズ②

「移動という尊厳」と呼んでいます。

しかし、年を取るにつれ、行動半径が狭くなります。遠方まで出掛けていた人が、いつしか近くの街中だけになり、やがて自宅の周囲、室内のみと行動半径は、生命エネルギーに比例してどんどん狭くなってきます。それでも人は移動しようとする動物です。

精神科病院 認知症の周辺症状（暴力や暴言、徘徊、妄想）がひどくなった場合、患者の受け皿となるケースが多い。しかし入院期間の長期化や症状が改善しても6割が退院できないなどの点が問題になっている。

おとなしくなります。「順応」ないし「適応」なので「あきらめ」と言ったほうが適当かもしれません。

「脱走」は、人間、いや動物の本能かもしれません。施設に入られた認知症の人の多くは、当初は必死で「脱走」を試みます。2階から脱走した人もいました。しかし、「しばる」と、徐々に